

序

第一章 背 景	一
ドイツの学界の構造と姿勢	二
ワイマール期の現代物理学の中心地	七
国民社会主義者の権力奪取	三
第二章 ゲッチングン——一九三三年	二一
公然たる抗議——ジエームス・フランク	三
消極的抗議——マックス・ボルン	七
静かな抗議——リヒャルト・クーラント	三一
研究所	三九
あとがき	四九
第三章 追放政策の代償	五
アルバート・アインシュタインとフリッツ・ハーベー	五
数量的損失	五九

質的損失

六五

第四章 政府と物理学の教授たち	六九
教育省	七〇
物理学の教授団	七一
追放政策に対する反応——マックス・プランクとウェルナー・ハイゼンベルク	八〇
自主独立の精神——マックス・フォン・ラウエ	八六
公然とした抗議——フリツィ・ハーバー追悼式	九三
私的抗議	九四
国際的孤立	九五
第五章 アーリア的物理学者——フィリップ・レーナルト	一〇七
誕生からノーベル賞まで——一八六二年—一九〇五年	一〇七
ノーベル賞から第一次世界大戦まで——一九〇五年—一九一八年	一一一
相対論とバート・ナウハイム——一九一九／二〇年	一一六
反ユダヤ主義と国民社会主義——一九二一年—一九三六年	一二四

第六章 アーリア的物理学者——ヨハネス・シュタルク 一四〇

若い頃の経歴と結果としての現代理論の拒絶——一八七四年——一九二九年 一四〇
学界行政——一九一九年——一九二一年 一四一
学界からの追放——一九二一年——一九三三年 一五一
物理学共同体を支配する企て——一九三三年——一九三六年 一五六

第七章 アーリア的物理学 一六六

アーリア的物理学の經典 一九九
アーリア的物理学の世界観——自然と実験 一七三
アーリア的物理学の世界観——自然研究者 一七九
民族主義的物理学 一七八
客觀性と國際性の拒絶 一八三
アーリア的物理学と技術 一八五
自然崇拜 一八七

自然の征服 一八九

第八章 アーリア的物理学の政治運動 ······

一九三

アーリア的物理学キャンペーンの開始 ······

一九三

ゾンマフェルトの後継者問題 ······

二〇四

国民社会主义者ドイツ大学教員連盟 ······

二〇五

ミュンヘンの教授団と帝国教育省 ······

二〇七

親衛隊とハイゼンベルク問題 ······

一一一

アーリア的物理学の勝利 ······

一一一

第九章 戦時下 ······

一三七

一九三九年までのドイツの学術的物理学 ······

一三八

アーリア的物理学に対する攻撃 ······

一三八

イデオロギーの衰退と戦争の終結 ······

一三九

第一〇章 結論 ······

一六六

訳者あとがき ······

二八五

参考文献

人名索引